第2号
2021.3

奈良県

世界遺産をもっと知るための

世界遺産ジャーナル

目次

《巻頭特集》**世界遺産を語る**（後編）
ー 松浦晃一郎氏　青柳正規氏　荒井正吾知事による鼎談 ー
1.「飛鳥・藤原」のストーリーを証明できるか
2.外来文化の受容形態ー「伝来」か「招来」か
3.天皇陵を構成資産にできないか
◯もっと知りたい世界遺産　◯「飛鳥・藤原」を世界遺産に!

奈良県

《巻頭特集》

世界遺産を語る 後編

司会：奈良県文化・教育・くらし創造部次長
建石徹

ユネスコ事務局長として多くの世界遺産の登録・保全を進めてきた松浦晃一郎氏と、研究者として、そして文化庁長官として日本の世界遺産を送り出された青柳正規氏をお迎えし、荒井知事を交えてお話を伺いました。

荒井正吾
奈良県知事
1945年生まれ。運輸省入省。1999年、海上保安庁長官。2001年、参議院議員を経て2007年より奈良県知事。

松浦晃一郎氏
第8代ユネスコ事務局長
1937年生まれ。外務省入省後、駐仏大使を経て、1998年世界遺産委員会議長、1999～2009年、アジア初となるユネスコ事務局長を務める。

青柳正規氏
奈良県立橿原考古学研究所所長
1944年生まれ。東京大学名誉教授。2013～2016年文化庁長官。2019年より橿原考古学研究所所長を務める。専門は古代ローマなど古典考古学。

1.「飛鳥・藤原」のストーリーを証明できるか

建石：それでは「飛鳥・藤原」についてお話しいただきたいと思います。現在、顕著な普遍的価値（OUV）の検討を進めていますが、松浦先生がご指摘の「世界的」な価値を意識して、進めなければなりません。「飛鳥・藤原」では、律令国家日本の成立を価値のひとつにしていますが、日本史としてではなく、「世界的」な価値としてどう位置づけるかが課題です。

松浦：非常に重要な点です。「飛鳥・藤原」の時代以前は、いわば豪族の連合国家で、この時代に天皇を中心とした律令国家「日本」を裏付ける「不動産」として遺産がしっかりあるかが一番の鍵です。たとえば、19世紀の前半、アメリカのモンロー大統領は奴隷を解放しリベリア[1]に送り返しました。その解放奴隷がリベリアで最初に到着した場所がありますが、そこを世界遺産にしたいという話がありました。しかし、現地に行ったら何も無い、単に波止場だけなのです。彼らにとっては、「私たちにとって一番重要なリベリアの出発点」なのですが、これは世界遺産にできなかった。

荒井：今みたいな話はとても貴重です。世界遺産の基準を「飛鳥・藤原」に当てはめられるか、疑問に思うこともあります。「飛鳥・藤原」の価値をいつも議論するのですが、「物」として見えづらいという面があるのです。歴史はすごいと感じますが、歴史はこうだと決め打つのが難しいところもある。しかし、ある程度決めてわかるストーリーにしないとうまくいかない。ただ、『日本書紀』の解釈や、中国や韓国の歴史書との整合性をみれば、歴史の舞台となった場所はこの辺ということはいえる。だから、「飛鳥・藤原」の大きな値打ちは、遣隋使や遣唐使が行ったとか、渡来人が来て仏教が伝わったということは言えます。歴史書ではこう、こんな遺跡があるのでわかるでしょうと。そして、その影響が現在に続いているというところまで言えたら、すごく顕著な価値ですね。世界でもそういう価値があるのだなと認められるように、そこまで自己認識を高める。自己認識を高めるというのは、今日みたいに徹底的に議論して強固にしていくこと。我々自身がどうかなと、自信なく思っていては駄目ですね。（笑）

荒井：例えば『日本書紀』には即位の儀式として大嘗祭[2]をやったと書いてあります。大嘗祭は皇居で今もやっています

よね。離れた場所で続けている、「飛鳥・藤原」にはもうないけれど、そこで始まったのが、今も日本では続いている。即位儀式というのは、物証になりますか。

松浦：そこは難しいと思います。世界遺産は、現在では対象範囲が非常に広くなっていますが、そのときの物証というのは、不動産でなければいけない。だから、大嘗祭というのはストーリーで、無形文化遺産の対象にはなりますが、世界遺産では裏付けとなる不動産が連動して存在しないといけない。ストーリーが独り歩きしては駄目なのです。去年に現地を見ましたが、そういう意味で言うと天皇陵に重点が置かれていないことが残念。当時の姿のまま残っているのは天皇陵しかないのです。

荒井：高松塚古墳とかキトラ古墳の壁画とか。ウズベキスタンや唐の長安の壁画にあるソグド人のスカート（裳）と高松塚古墳壁画の女性像のスカートが同じなんてことが証明されたら、それはアウトスタンディングになりますか。

松浦：それも交流というストーリーにあたります。連合国家から中央集権的な律令国家へ、それが「飛鳥・藤原」の中核です。今おっしゃったのは、登録基準（ii）の「価値観の交流」にあたります。もちろん、いろいろな交流を踏まえて「飛鳥・藤原」が作られたという基本的なストーリーになります。だから「飛鳥・藤原」はまさに中国との交流の影響で藤原宮ができたのだけれど、残念ながら肝心の藤原宮は地上に残っていない。

荒井：藤原宮は正方形だということは何となくわかる。四角は中国の思想。大極殿は大和三山の真ん中で、そういう道教思想で大極殿をつくったということは、伝来した思想をもとに、宮殿、都城をつくろうとしたということ。建物は平城宮に遷ってしまったので痕跡だけが残っていますが、これが物証になるのですか。

松浦：世界文化遺産の分類には「遺跡」がありますからね。

青柳：法治国家という言葉がありますね。法治国家をもう少し大きい概念で、「法化」といいます。これは法律で何事も社会システムを決めていくという一番大きな概念。「飛鳥・藤原」の時代はいわゆる仏法や律令という、法によって社会全体のシステムをつくろうとした。これは世界的に見てもすごい実験です。今、松浦さんがおっしゃるように、それを証明するものが、その四角形の登場でも、何でもいいのだと思います。概念は立派で大きいのです。だからそれを証明できる、しかも中国から持ってきた、というようなことが証明できれば、かなり有力なのではないかなと思います。一つ一つはね、唐の長安と比べてみすぼらしくても構わない。というのは、それまでのこの日本の状況が、仏法・律令によってね、当時として本当の近代国家に生まれ変わるのです。これはすごいことですよ。

高松塚古墳と壁画（写真提供:明日香村教育委員会）
「飛鳥・藤原」の構成資産のひとつ。1972年の発掘調査で極彩色の壁画が発見されたことで著名。中国唐の古墳壁画に類似する男女群像は当時の服飾や風俗を知る貴重な絵画資料で国宝に指定されている。

荒井：その律令とか、本当の律令国家になったの?形だけではないかと内心ちょっと思ったり。形だけ受け入れるのがうまくて、とか。

青柳：知事には信じて欲しいですね、なったのだと（一同笑）。

青柳：例えばね、明治前後に朝鮮や日本にどんどんキリスト教宣教師が入ってきます。その時に、日本はまだ徳川幕府と明治政府のレジーム（体制）があったから、あまり大きく影響を受けなかったのだけれど、李氏朝鮮の政府は機能不全を起こしていたから、ある種の統治システムとしてキリスト教が機能するのですね。だからその日本と朝鮮のキリスト教の普及率の違いというのは、既存のレジームの状態によって違っているともいえる。

荒井：日本と朝鮮を比べると面白いと思うのですよ。朝鮮は朱子学が主体。日本は陽明学[3]。陽明学は非常に弾力的で合理主義、実践的。それで明治維新も乗り越えた。話を戻すと、古代は何で乗り越えたのかな。古代が近代化したということは、例えば中央集権に変えたということです。大化の改新から天皇制を確立し、『日本書紀』を作ったという、これだけでもすごく大きな中央集権国家に変わったといえる。

2. 外来文化の受容形態 ー「伝来」か「招来」か

青柳：日本の中で、良いものを良いものとして認める、中国のシステムとか、あるいは仏教などを、取り込むわけですよね。それは日本の長い伝統的特徴で、平安、鎌倉、室町時代でも同じです。柔軟性があって日本風に、国風文化にして、そして成長力が弱まってくると、また外国から、特に中国からいろいろもらってくる。

荒井：遣隋使ですが、他国は朝貢して冊封[4]をしてもらいます。しかし日本は冊封を断り、朝貢したかどうかで『日本書記』と、『隋書』とで全然違うことが書いてある。2回目の遣隋使で天子とかを自称していますよね。「天子とは何だ、お前は?」と怒られた。怒られたことは、中国の『隋書』には書いてあるけれど、『日本書紀』にはない。これは二枚舌でこうなったのかな。大国から離れて、巧みにいなす。このやりとりの巧妙さは材料になるのかな。日本の国を救うときのやりとりというところ。

青柳：「伝来」なのか、あるいは「招来」なのか。大きく影響を受ける方が喜んで引っ張り込むのが普通の文化伝播の仕方なのです。だから、よく言われるジャポニズム[5]というのは、フランスあるいはイギリスでもドイツでも、そのころ自分たちの文化では創造力が失われ、袋小路にはいりつつあったときに、それまで知らなかった日本の浮世絵を「招来」するのです。だから、日本が影響を与えたのではなくて、彼らが、日本文化を招き入れた。

荒井：それはユニークだったから。インスピレーションを与える素材があったからのような気がします。

松浦：やはりね、日本では新しいものは興味深く受け入れて、新しい文化を作る素地があって、日本民族や独特の文化が育ってきた。だから、例えば明治維新の前にも何度もあるけれど、基本はしっかり維持し、良いものをうまく取り込む。

荒井：そういう生き方が一つの文化みたいな。弾力的にクッションを置いて生きてきた。オリジナルかどうか忘れてしまうけれど、伝来ものとオリジナルを忘れて過ごせる。オリジナルばかりの国はないのだから、うまく残すとか、それをこなすとかは、ある面で面白いユニークな文化ですね。

松浦：さっき知事がおっしゃいましたけれど、『日本書紀』は、やはり天皇制を正当化するためのもので、中国の歴史書とは相当違うと思います。中国の歴史書や、『古事記』・『日本書紀』、考古学の成果、この3つをしっかり検証して、客観的に日本の歴史をみていただきたいと思います。

青柳：遣唐使でいうと、最近、中国で吉備真備[6]が書いた墓碑が出てきました。それは、「日本国朝臣備」と書いてある。文章は中国人がつくったらしいけれど、吉備真備は中国人が認める達筆だから、彼が字を書いているのです。それから、阿倍仲麻呂、井真成[7]や、それから向こうで皇帝の秘書になった藤原清河もいるわけでしょ。それから空海は行ったときから素晴らしい大変な天才だと言われている。そういう意味で、個人の力を持っているのは結構いるのですよね。

荒井：渡来人の存在も値打ちになりますよね?奈良時代の菩提僊那とか仏哲とか鑑真とか、このような人々が来たことは、ハイレベルの文化交流の証拠みたいになるのだけれど。百済が滅びたときに、百済の人びとが日本、そして奈良に多く来ました。その人々が瓦を作ったり、山城を作ったりいろんなものに関わった。

青柳：文禄・慶長の役のとき豊臣秀吉が陶工を連れてきま

飛鳥宮跡（左）と藤原宮跡（右）

「飛鳥・藤原」の構成資産の核となる2つの宮殿跡。飛鳥宮跡は630～694年の間に使用された舒明天皇の飛鳥岡本宮、皇極天皇の飛鳥板蓋宮、斉明天皇の後飛鳥岡本宮、天武天皇の飛鳥浄御原宮にあたる。藤原宮跡は、694年から710年の平城遷都まで用いられた。一辺約1kmの正方形で瓦葺き建物の大極殿を備えるなど、中国の建築様式を初めて採用した。この二つの宮殿の比較によって、政治体制の発展が理解出来る。両宮殿ともに地下に良好な状態で遺構が保存されているが、現地での説明や見せ方が課題となっている。

す。陶工は佐賀や鹿児島で、とんでもなく窯業を発展させるわけですよね。ところが、朝鮮半島の陶工がその後、窯業を発達させたかというと、それほど発達していない。朝鮮はあくまでも両班の、文人の国です。日本はものづくりを結構尊重するというようなところはありますね。

一方で、朝鮮通信使が来て、宿舎で漢文の添削なんかを朝鮮通信使にやってもらうことが、日本では大変流行っていた。だからそれまでは中国文化の理解というのは朝鮮半島の使節の方が上だった。

荒井：飛鳥時代に中国へ国書を持っていくとなると、やはり漢文でわかるよう国書を中国語で書かないと通じないですよね。「こんな歴史書があるぞ、読めるか?」というと、『古事記』は読めないけれど、『日本書紀』は読めるぞと。国書も、通訳がいて、立派な漢文を書いたから通じたと思いますが、それは渡来人じゃないかと。飛鳥時代には朝鮮だけでなく、唐の人も、いたのじゃないかな。

青柳：さっき申し上げた遣唐使でも、阿倍仲麻呂なんかは唐で科挙[8]に受かってしまう。科挙に通るだけでもすごいのに、どんどん出世して、それこそ次官級にまでなってしまう。偉くなり過ぎて玄宗皇帝から「日本に帰るな」なんて言われて、結局帰れなくなってしまうという。自分の首を絞めてしまうけれど、そういう人を輩出しているのですよね。当時の日本のレベルは非常に高かったことは確かですね。

荒井：唐は非常にグローバルでしたね。西域のソグド人も安禄山[9]とか偉くなって。外国人は日本人だけじゃなく、他の国の人も多くいた。能力主義でやっていたのが、よかったのかもしれませんね。

建石：「飛鳥・藤原」の方に話を戻します。先ほどから、ずっと流れている文化相対的な見方の話と、「飛鳥・藤原」をはじめとする日本の遺跡の見せ方、保全のあり方のお話がありました。ぱっと見たら、ただの原っぱ、田畑というような場所をどう見せていくのかという課題があります。「奈良ドキュメント」はヨーロッパの石の文化とは異なる、東アジアの木造建造物のあり方が問題にされました。「飛鳥・藤原」は地下に埋蔵された遺跡に、重要な情報がまだ眠っていて、その中に『日本書紀』、『続日本紀』のパーツが入っている、そういう埋蔵文化財を中心とした資産群をどのように表現していくかという課題があります。

松浦：「奈良ドキュメント」というのは、「石の文化」対「木の文化」、まさに日本から打ち出した歴史的な業績ですね。それから、埋蔵文化財というのは、これは日本と東アジアに独特なものではなくて、世界的にあるわけです。例えば、アジアではモヘンジョダロが見てわかるというのは、地上部にも残る遺跡だからですね。

歴史的なストーリーがしっかりしている、当然それに加えて発掘されたものが残っている、ですから「飛鳥・藤原」では、遺跡とストーリーの二つともあります。

繰り返しになるけれど、おもに天皇陵を中心に遺跡が残っているから、それをうまく組み合わせて、日本の歴史の中での非常に重要な段階を描いていくのが良いのでは。わたしは是非、世界遺産にしてほしい。世界遺産で日本の歴史がわかるような形になるのは日本人のために非常にいいと思っているのですよ。

そういう意味で、「百舌鳥・古市古墳群」も登録されたし、「古都奈良の文化財」も登録されています。中核となる「飛鳥・藤原」も登録されて欲しいのだけれど、そのためには構成

資産がかなりバラバラで、うまく結びつける必要がある。ストーリーが良いだけでは世界遺産にならない。裏付けとなる不動産が無いといけない。そして不動産を見て、ストーリーも変えていかないといけない。その反復作業がより難しいので、引き続きしっかりやってもらう必要があります。

荒井：よくわかりました。すると作業工程として、一つは、ストーリーをちょっと大胆に作る。例えばテーマとしては、政治の中心とか政権、天皇制ができた、とある程度言い切る。そのストーリーをどのような過程で、どのようにできたのかということを、日本にある物証と国外にある物証とで説明する。『隋書』にもある遣隋使が来たよという記事とか、ストーリーを補強するものを集めるというのも一つあるのかな。そういう作業をとにかくしないと歴史の構築ができないというような感じかな。

3. 天皇陵を構成資産にできないか

松浦：登録基準(iii)を満たすために、やはり天皇陵に重点を置いて欲しいですね。「百舌鳥・古市古墳群」ですが、当時ユネスコにいた私への最初のアプローチは、「仁徳天皇陵古墳」を世界遺産にしたいということでした。私が言ったのは、「仁徳天皇陵古墳」だけでも、確かに価値はあるけれど、やはり古墳群として百舌鳥や古市の古墳を全体としてまとめる。宮内庁の説得が必要だけれど、日本の古墳時代中期の古墳群全体を入れてと。天皇陵も含めて他に古墳が多くあるのだよね。

　ストーリーを作って、もう1回現地を見て、それに合わせてストーリーを見直す。原案通り認められたので嬉しいです。「百舌鳥・古市古墳群」の登録の際、「その中に入れません」で世界遺産にできるのかと関係者が心配していました。これは、私も自信があったわけではないけれども、是非頑張れと言って、ユネスコも認めたわけです。だから、もう先例があります。

建石：天皇陵が不可欠という意味では、藤原宮の中軸の延長線に天武・持統天皇陵古墳があり、一つのお墓に合葬されている。ここは宮内庁とも相談し、資産に入れさせていただきました。天皇専用の八角墳をつくる、その最初が舒明天皇ですね。それが、天武・持統天皇陵古墳で完成します。

松浦：天皇陵としてだけでなく、八角墳というものをつくったということを示している、とても重要な位置づけですね。

青柳：あと、この間見せていただいた藤原宮跡の復元柱とか、ああいうのを建築家と相談するとか、ちゃんとした石材を使うとか。非常に難しいけれど、目立つようで目立たないような。それをベースに、大極殿とか朱雀門とかが一直線にあるとか、視覚的にもきちっと証明できれば、もちろんオリジナルじゃないのだけれど、その都市の物理的な特徴がそういうものでわかれば良いのですね。

荒井：そうですね、思想的なことが何か形が見えるようになれば。都城の思想、日本で最初の都城なのだから、どういう都城だったのかということ。うまく証明できれば、遺跡も現物は見えないのだけれども、こういう思想でできた都城だということを言えば、現物がそこにあるというのはものすごく大きなことですよね。

青柳：それから飛鳥水落遺跡では水時計、それに飛鳥宮には苑池があるし。それらは、大きな国づくりが実現しつつある状況を示していますね。

建石：先生方には長時間にわたりご議論いただき、ありがとうございました。私たちも今後、推薦書の内容に磨きをかけていきます。一方で、構成資産候補である考古遺跡を「現地でどう見せるか」というような課題があります。イコモスの現地調査への備えもありますが、もっと中長期的な見せ方、保全のあり方もしっかり考えていこうと思っています。願わくば次は現地で、「こんなに進んだのだね」なんていうことをお聞かせいただきたく思います。

本鼎談は2020年7月に実施しました

用語集

1. **リベリア**:西アフリカに位置する国家。アメリカ合衆国の黒人解放奴隷たちが1822年に帰還をはじめ、1847年に建国。国名はLiberty(自由)からとられている。
2. **大嘗祭**:天皇が即位後はじめて神前に新穀を供え、国家安寧を祈る皇位継承に伴う儀式。天武～持統天皇の頃に成立したとされる。近年では2020年11月14･15日に皇居で実施された。
3. **朱子学と陽明学**:それぞれ儒教の学派。12世紀ごろ成立した朱子学は「先知後行」として知識が行動に先行し、「理」や「礼」など道徳主義を重んじる学問であり朝鮮王朝の国家統治理念として用いられた。朱子学の批判としてはじまった陽明学は「知行合一」として知識と行動は一体のもので、行動により重きをおいていた。
4. **朝貢と冊封**:中国王朝の皇帝(天子)を頂点とし、周辺諸国・民族とのあいだで称号や印章(例えば「漢委奴国王」やその金印)などを介して名目的な君臣関係を結ぶ外交関係が冊封体制である。この冊封体制のもと、周辺諸国・民族が皇帝の「徳」を慕って贈物を献上することを「朝貢」と呼ぶ。
5. **ジャポニズム**:19世紀後半にヨーロッパで流行した日本趣味・ブーム。葛飾北斎や喜多川歌麿ほかの浮世絵がゴッホやモネなど画家に与えた影響は有名。
6. **吉備真備**:695～775年。奈良時代の学者・政治家。二度唐に渡っている。18年間にわたる最初の留学で天文学や音楽、兵学ほか多分野の学問を学び多くの知識を日本に持ち帰った。真備が留学中に記したとされる「日本国朝臣備書」銘の墓誌が2019年に中国洛陽市で発見された。
7. **井真成**:(せいしんせい／いのまなり)699～734年。日本人留学生とされる。2004年、中国西安市(長安)で墓誌が発見された。墓誌には「日本」の国号を記す。死後、唐より尚衣奉御(皇帝の服飾管理)の官職が贈られた。
8. **科挙**:隋代から清代まで1300年間にわたって続けられた官僚登用のための試験。家柄や身分に関係なく受験でき、実力のある優秀な人材が集まった。
9. **安禄山**:703～757年。父がソグド人の康氏、母は突厥人。唐の軍人。玄宗皇帝に重用されるが、宰相と対立したことで「安史の乱」を起こし、洛陽、長安を陥落させ、唐王朝の基盤を崩壊させた。乱の途中で息子に暗殺される。

もっと知りたい 世界遺産〈第2回〉

どうすれば世界遺産に登録されますか？

世界遺産は、世界や人類にとって「顕著な普遍的価値（Outstanding Universal Value＝OUV）」をもつ文化遺産・自然遺産でなければなりません。世界遺産委員会より示される10の登録基準のうち一つ以上を満たしていることが必要です。そしてOUVを証明する要素が過不足なくそろっていること（完全性）、材質やデザインなどが本来の価値を有していること（真正性）、さらに保護が確実に担保されていることが求められます。

将来的な世界遺産候補として政府よりユネスコに提出される「暫定一覧表」に記載された上で、OUVを説明し、それを証明する構成資産や登録範囲、保存計画を定めた推薦書をまとめて提出し、世界遺産委員会で審議（年1回、一国1件）される必要があります。

世界文化遺産の登録基準（自然遺産対象のvii～xを除く）

i）人間の創造的才能を表す傑作である。

ii）建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値観の交流又はある文化圏内での価値観の交流を示すものである。

iii）現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在（少なくとも希有な存在）である。

iv）歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、或いは景観を代表する顕著な見本である。

v）あるひとつの文化（又は複数の文化）を特徴づけるような伝統的居住形態若しくは陸上・海上の土地利用形態を代表する顕著な見本である。又は、人類と環境とのふれあいを代表する顕著な見本である。（特に不可逆的な変化によりその存続が危ぶまれているもの）

vi）顕著な普遍的価値を有する出来事（行事）、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある（この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい）。

「世界遺産条約履行のための作業指針」より

世界遺産登録までの流れ

ユネスコ世界遺産センターに暫定一覧表提出（世界遺産条約締約国政府）

▼

暫定一覧表から準備が整った資産を正式推薦（世界遺産条約締約国政府）

▼

国際記念物遺跡会議＝ICOMOS、国際自然保護連合＝IUCNの現地調査

▼

ユネスコ世界遺産委員会で登録決定

国内の暫定一覧表記載資産　2021.3時点

種別	記載年	資産名
文化	1992	古都鎌倉の寺院・神社ほか
文化	1992	彦根城
文化	2007	飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群
文化	2009	北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群（2020年推薦中）
文化	2010	金を中心とする佐渡鉱山の遺産群
文化	2012	平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡―（拡張）
自然	2015	奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島（2019年推薦中）

第2回　飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群

「飛鳥・藤原」を世界遺産に！

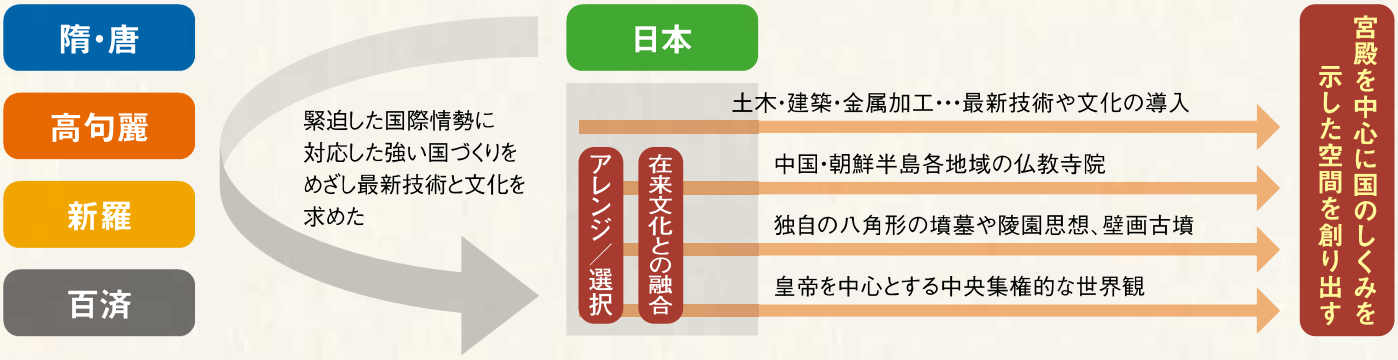
http://www.asuka-fujiwara.jp

「飛鳥・藤原」の世界遺産としての価値とは?

日本史上重要な価値をもつ「飛鳥・藤原」ですが、世界遺産に登録されるには、世界的な価値を証明しなければなりません。そこで「飛鳥・藤原」のもつ国際的な価値を見ていきましょう。

登録基準(ii)　6世紀末～8世紀初頭の東アジアにおける技術や文化の交流を示しています。

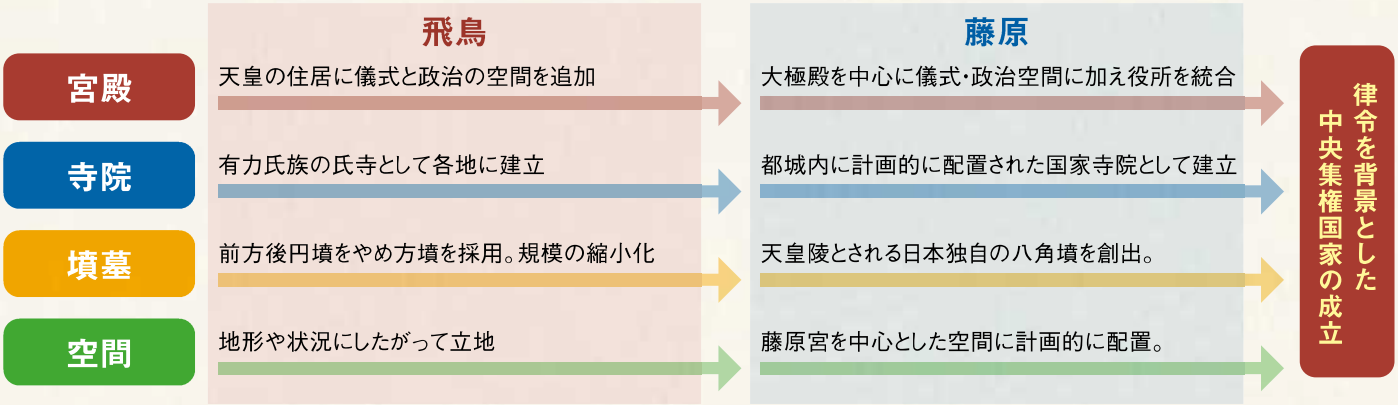
「飛鳥・藤原」の時代、長らく分裂状態にあった中国で、隋や唐という統一王朝が成立し、周辺諸国への影響を強めました。緊迫する国際情勢の下、日本は強い国づくりをめざして、中国・朝鮮半島との交流によって得た最新の技術や文化を自分たちでアレンジし取り込みました。国のしくみを目に見える形にした藤原宮を中心とする空間と、それを構成する数々の資産を生みだした技術と文化の交流を「飛鳥・藤原」は示しています。



登録基準(iii)　遺跡の変遷により国の成り立ちがわかる唯一の例です。

「飛鳥・藤原」以前の時代は、大きな古墳を造り、各地の有力者が権威を示した時代でした。そして「飛鳥・藤原」より後の奈良時代は、整然と区画された都のなかに役所や仏教寺院が建ち並ぶ時代になります。この両者の間には、政治体制や思想、技術など大きな変化があります。

「飛鳥・藤原」は、宮殿の構造、寺院の建物配置、墳墓の形、これらの位置など遺跡の変化が判明しています。これらの比較によって、中国を模範とした国づくりの過程を示すことができる唯一の例です。



【コンセプトの内容は令和3年3月時点のものです】

登録基準(vi)　和歌や俳句など日本の詩歌の原点『万葉集』には、「飛鳥・藤原」当時の多様な人々の心情と光景が活き活きと詠われています。

現在もひろく親しまれている『万葉集』の存在は、「飛鳥・藤原」の地を訪問し、当時に思いを馳せる原動力となっています。

編集・発行　奈良県文化・教育・くらし創造部文化資源活用課　令和3年3月30日発行
表紙:「飛鳥・藤原」遠景(耳成山上空から南へ)

バックナンバーはWEBで公開しています。
奈良県　世界遺産ジャーナル